生活と心理臨床

－児童福祉施設での心理臨床の可能性－

企　画　者：茂木洋（四天王寺国際仏教大学）、益田啓裕（あゆみの丘）
司　会　者：茂木洋（四天王寺国際仏教大学）
話題提供者：新美裕之（あゆみの丘）、渡辺葉一（あゆみの丘）、永井享（希望の杜）、樋口啓司（大阪府子ども家庭センター）
指定討論者：川畑直人（京都文教大学）

児童福祉施設に勤務する施設臨床心理士は、施設特有の臨床的現実の中で実践を行っている。中でも、子どもにとっての生活空間である施設内に心理治療空間が置かれていること、つまり両者の分離を前提とする伝統的な心理臨床設定とは異なるということは、心理士の側に“伝統的なアプローチが通用しないのではないか”という思いを喚起しやすいようである。その一方で、心理士が施設の生活場面に関わることが、心理臨床および生活臨床の双方にとって、有意義であると認識されることも事実である。このように“施設での心理臨床”という設定は、心理治療過程に影響するとともに、施設のあり方へも影響を与え、施設臨床心理士のアイデンティティ形成を時に支え、時に揺さぶる。その中で施設臨床心理士は心理臨床家としてのアイデンティティをいかに獲得しているのだろうか。

本シンポジウムでは、常勤の施設臨床心理士として情緒障害児短期治療施設や児童自立支援施設に勤務した経験を持つ話題提供者が、生活と心理臨床の関係に焦点をあてながら自らの実践活動等を報告する。生活場面で心理士が果たす役割、生活場面に触れることが心理臨床活動に及ぼす影響、生活場面と臨床場面を切り離すこと／切り離さないこと等、児童福祉施設における心理臨床の抱える課題と可能性について考えていきたい。